
心理逆転ゲーム

妹明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心理逆転ゲーム

【Nコード】

N2659Q

【作者名】

妹明

【あらすじ】

人生で、何度もやってしまう過ち……。それは嘘。

その中でもとびきりの嘘つきばかりを集めたこのゲーム。

三年間の間に100回未満の嘘しかつけないこの世界。

貴方はそんな世界で生き残る？

それとも……100回目の嘘についてあの世に飛ばされる？

ブローグ

「優子ちゃん、なんで嘘つくの？」

嘘をついたことに、よく幼稚園の先生に怒られた。それでよく泣いた。

昔から沢山の嘘をついた。地獄に堕ちる程、山のように。

嘘をつく事で自我を保ち続けていたと言っても過言ではないあたし。いい子にしなよ、なんて言葉はあたしにとって絶対不可能の行為だった。

そうしていたのは、本能じゃなくて、自分の意識。止めようと思えばいつでもやめられた。

それをしなかったツケが今、回ってきたみたい

嘘つきな娘。

「優子、また嘘ついたでしょ？」

「あー、バレた？」

「どうしてくれんのよ！ 答え全く違うのなんか教えて!!」

「んー。そんなの、あたしを信じたあんたが悪い」

「サイテー!! 前々から思ってたけどもう堪忍袋の緒が切れたっ
！ 絶交する!!」

「はいはい、勝手にしなー」

あたしは頬杖つきながら片手をヒラヒラと動かした。

嘘をついてきて、後悔したのなんて精々小学校入る前まで。

その後は、後悔も悪気も何もかもが泥沼に入っただかのように、何も
感じなかった。

悪い事なのくらい、単細胞のあたしですら分かる。

でも、やめる気はない。嘘をこれからも付き続けれると思う。

そんなことを考えてたから、あの招待状が来たのかもしれない。

招待状と少年

その日、夕刊を取りにポストに向かうと、玄関に人が立っていた。男の子。あたしの2、3歳くらい年下の子供がヴァンパイヤみたいな格好して立っていた。

「……？」

「鹿島優子様ですね」

「なんで、名前を？」

「招待状をお届にきました」

そう言つて少年は近寄り、あたしに真つ黒の封筒を無言で手渡した。

「なによ……これ」

「招待状です」

「なんの？」

「ゲームのです」

「ゲーム？」

聞き返すと黙つて首を縦にゆっくり振る少年。そして、こう続けた。

「詳しくはこちらをお読み下さい」

言われるがままに招待状を開ける。無意識のうちに。その時、少年の口元が微かに笑っていた気がした。

『今回は、我がゲームにご参加いただき誠に有難うございます

これを今、開いたと言う事はゲームに参加していただけると言う意思表示ですので

もうこれ以下より引き返すことはできません

それでは、これよりゲームの説明に入ります

このゲームは心理ゲームです

本来なら人を騙し、だし抜き通した人間が勝ちと言うのが王道ですが

今回は逆です

人を騙す度に、命が減ります
簡単に申し上げますと

先の話に出てきたように自分を含め人を騙し、だし抜く度に
死に近づいてきます

つける嘘は、99回までです

100回目の嘘をついた瞬間にゲームオーバーとなり
処刑人が現れます

そして常に招待状を渡してきた、付添い人マネジメントが傍にいます
その者が持つている花が全て散った時に
100回目の嘘をついたということですよ

そして、このゲームの期限は3年です

以上がルールです

マネジメント
質問があれば付添い人にお聞きください」

そこで、自我を取り戻した気がした。しっかりと読んだ記憶も、この招待状を開いた記憶もあるから、そう言うのが違和感もあるけど、一番近い気がした。

「嘘をつく度に死に近づくゲーム……」

「参加が決定いたしました。これより、ゲームを開始します」
感情のない淡々とした声。

「それでは、またどこかで」

少年はカッカツと言う革靴の音を立ててどこかに消え去った。

「なに…、あれ」

嘘つき娘と少年

嘘をつけなくなったらしい翌日。

学校に向かう為に玄関から出ようとすると、昨日のヴァンパイヤ少年が、例のヴァンパイヤの姿で立っていた。

マネジメント
「付添い人は、いつも傍にいるよおくん。…だっけ？」

「はい。僕の今の名前は神寄^{かんざき} 樟^{くぬぎ}です」
「本当？」

昨日の事があるから信じられなかった。

マネジメント
「付添い人はこのデスゲームのルールは適応されませんから」

「そっぴゃあ、昨日の嘘をつく度に散っていく花って？」

「この花ですね」そう言っ出てしてきたのはバラの花。黒い。どこまでもこのデスゲームは真っ黒い設定だった。

試しに引っ張ってみた。そのバラを。

「無駄ですよ」

樟は薄く笑った。

「やっぱ特殊な条件下じゃないと散らない。って？」

「そういうことですね」

「でもさ、この花一個だけに本当に100枚も花びらついてんの？」

「ついてないですよ。一個につき8枚程度しかついてないです」

「え？ じゃあ」

「一個だけじゃないですよ。まさか。20個くらいはありますよ」

「お誕生日の花束並みだな」

そう言っ苦笑いするあたし。そして、軽く体を伸ばした。

「さあーて。学校に行きますかね」

「その必要はありません」

「は？」

「貴方はこのゲームに参加した瞬間から、この世にいる、この世ならざる者になってますから」

顔色一つ変えずに樟はそう告げた。そして、無言で玄関の方を指差すところ続けた。

「貴方の穴を埋める為にこちらでドッペルゲンガーを用意しておきました。これからは彼女が貴方です」

「い、意味分かんない… どういうことなの？」

「僕も貴方も、既に周りの一般人にも見えてないんです。ああ、心配しないで下さい。彼女の嘘は貴方のゲームに影響する事はありませんから」

言い終えると同時に、

「お母さん。行ってきます」

という声と、いつてらっしゃいと言う声が聞こえ、アタシが制服を着てやってきた。

アタシはあたしに気付く素振りもなくそのまま学校へと向かう路地を進んで行った。

「分かったでしょ？ 貴方はもう既に貴方じゃない。ゲームに勝たない限り、貴方はもう貴方自身として生活する事は出来ない」

「な、なあ。もし、ゲーム期間中にあたしが死んだらアタシは…？」

青ざめた顔、震えた声であたしは聞いた。

リスクを背負うこと

「な、なあ。もし、ゲーム期間中にあたしが死んだらアタシは……？」
「急性の病死・事故死・自殺・他殺。」

この中のどれかをランダムで決められそれによって遅かれ早かれ死にます」

「で、でもさあ、こんな、人に見えない状態じゃあ、声も聞こえないんだろ？ だったら、3年も嘘つかないなんて結構簡単に出来るんじゃない？」

「誰が全ての者に見えないと言いましたか？」

「……！」

「見える人、聞こえる人もいます。たとえば僕らと同じ付添い人」

「ちよいまち！ このゲームって参加者一人じゃないの！？」

「一人だと言った覚えはありませんが……」

そう呟くと話を続けた。

「貴方方：プレイヤー参加者ですね」

「それ以外には誰にも見えないの？」

「ええ。大体は」

「そうなんだ」

少し悲しいような気分になった。

「さ、僕らゲーム関係者が住む寮に行きましょうか」

「……うん？」

言われるがまま、樟について行った。

途中、人と何人ともすれ違ったり、ぶつかったりしたけど、
誰一人、こちらを見る者も触れられる者も居なかった。

——はずだった。

新しい出会い

「こんにちは。初心者かな？」

そう言つて、話しかけてきたのは外国の腰ぐらいまでありウェーブが緩やかにかかっている金髪のコスロリ(?)少女と、樟と似たような——と言つても、マントは腰ぐらいで、フリフリの黒のミニスカ、網タイツニーソバージョン、黒の網あげブーツと言つた感じのこれまた如何にも外国人顔の顔金髪お団子の美少女が隣にいた。

「……！」

「驚いた？ 自分が見える人間が目の前にいることに」

あたしは無言で頷いた。

「だって、ワタシも君と同じ参加者だもん」
プレイヤー

「が、外人なのには？」 「誰も日本人だけだとは一言も言っていないせんよ」

さらりと樟はツツコむ。それを尻目にコスロリ(?)美少女はあたしに笑いかけながら話を続けた。

「ワタシ、ロゼッタ。ロゼッタ・クリストフ！ ロゼって呼んで。

彼女はミッシェルよ」

ミッシェルと紹介された女もよろしく。と軽く挨拶してきた。

「あ、あたし、鹿島優子……て、言うんです」

「ユーコ、でいいかな？」

「ぜ、全然」

「改めて、よろしく！ ユーコ」

そう言つて、ロゼッタは笑顔で握手を求めてきた。苦笑いしながらあたしも小さな声でよろしくと呟きながら、握手した。

こうして、あたしとロゼッタは出会った。

住む所

「ユーコ、これから宿舎に戻るの？　なら、一緒に行こう」

「ロゼッタ…さん。どっか行くんじゃないんですか？」

「ロゼでいいって。いーよ。別に。それに、カシマユーコなんですよ？　君」

「あ、は、はい」

フルネームで呼ばれ若干背筋がピンツと張る。

「ワタシと同じ部屋だし。同室同士よろしく！」

そんなあたしにロゼッタは気付いていないらしく、ニカッと子供のように幼い笑顔で言ってきた。

「ついたわ。ココよ。ユーコ」

そこは人間がその中に一人だけで入ったら、米粒よりも小さく感じられるんじゃないかと思うくらい縦にも横にも、そして、高さも大きい施設だった。

「ココが…」

「ココはね、^{プレイヤー}参加者が不自由な思いをしないように作られた施設だから無駄にデカイのよ」

「どういうこと…ですか？」

「基本ここに住んでれば何でも揃うわ。ショッピングモールもレストランも、映画館、その他レジャー施設、住居、公園……。あ、あと季節ごとのイベントなどもやってくれるわ」

きらきらとした笑顔で指を折り数えながら、きっちり説明してくれた。

「それとね、外泊届けさえ出せば、外へお泊りも可能よ。あとねえ、ココの敷地内で殴り合いのケンカしちゃ駄目だよ？」

「ん？　どうして？」

「無許可の暴行は、“ウソの花”を減らされる処分を受けちゃうわ」

「うえ！？マジかよ…」

「兎に角気をつけてよね。後ここは、。。。は欲しいって願えば基本的に何でも出てくるわ」

「便利な世界だ…ですね」

「所詮は空想世界だからね」

そう言つて、普通に施設の玄関へ向かつて行つた。

ロゼッタは普通に通されたが、あたしは玄関にいた警備員みたいな奴に引きとめられた。

「お前、何者だ」

「か、鹿島優子です」

名前が登録されてるみたいな事を移動中にロゼッタが言っていたので、そう答えたが

「そんな奴知らん。付添い人^{マネジメント}を連れてくるか、招待カードを持ってこい」

無視され、危うく追い出されるところだった。が、

「待って下さい」

「ん？ ああ、樟さんじゃないですか」

「その子、僕の参加者^{プレイヤー}です。追い出さないでやって下さい」

「え？ 樟さんの？ やや、これは失礼しました」

そう言つと、あたしに向かつて一礼し、すんなりと中に入れてくれた。

（態度が一瞬で変わった…！）

「ユーコ、あんたラッキーだよ」

やつとの思いで、入ってきて早々ロゼッタは機嫌よさそうに言った。

「なんですか？」

「だって、ワタシの部屋。最高階のいっちばあーん、いい部屋だもん」

「へえ…」

「日当たりもいいし、夜景もきれいなんだよ」

「ロゼッタ、さんはその部屋気に入ってるの？」

「うん！ でもさあ、唯一問題なのはそこが4人共同部屋だつてことだよ」

「え？ よにん？？」

「うん。部屋つて参加者付添い人の組、2組分だもん」
フレイヤー マネジメント

「ちょ、ちょい待って下さいっ！！ 男も一緒の部屋なんですか！？」

あたしは樟を指差しながら焦った声を出した。

「そーだけど？」

「気にしないんですか！？」

「気にした所で何か変わる訳じゃないでしょ？ 3年もあるんだよ？ 時期になれるって！」

そう言つてエレベーターのボタンを押した。

数秒後、エレベーターはすぐに来てそれに乗り込み、ロゼッタは5階を押した。

15秒程度で56階につき、スキップするようにロゼッタは自分の部屋へと行った。

そして、カードキーを専用の所に差し込み、カチャツとドアを開けた…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2659q/>

心理逆転ゲーム

2011年10月6日16時12分発行